

はあはあと肩で息をつきながら、グイグイと腰を突き出す。

興奮した様子のユウトが、汗ばんだ身体をグイッと寄せて体重を預けてきた。

ミオリの形のいいやわらかい胸が、グニッと潰される。乳首もグリグリと圧迫されている。

「んッ……。いたっ」

重たくて息苦しい。体温が上がって、熱い。

胸が押し潰されて痛いのに、ユウトは自分が気持ちよくなることに夢中で気づいてもいない。

（もう終わっちゃうんだ。今日も、、短かったな）

夫婦で愛を確かめ合える、親密な時間。

そのはずが、どこか冷めた頭の中にそんな言葉まで浮かんでしまう。

ブル、とユウトの腰が震える。ビュク、というかすかな振動が、ユウトがイッたことを知らせてきた。

スキンを外し、結ぶのに手間取ってから、満足そうに上気した顔を近づけてくる。

結婚して2年近い。ユウトとマッチングアプリを介して知り合った頃、ミオリは会社で事務員をしていた。

営業的な仕事柄か、スーツが板についていて爽やかに歯を見せて笑うユウトは、恋愛経験に乏しいミオリにとって魅力的に映った。

妻としてユウトを支える日常が自分にとっても幸せで、この日々は続いていくと思っていた。

でも、実際はユウトに言えない不満がだんだんと膨らんでいく。俺もやるからラクしていいよ、と調子よく言っていた家事を、ユウトは忙しいからと当たり前みたいに丸投げしてきた。それだけでなく、料理や掃除にほぼ完璧を求められている。

仲が良かった友人たちはミオリと前後して次々に結婚。引越して距離も離れてしまい、なかなか会いに行けない。

友人のSNSを見るたび、ミオリはだんだんこんなことを思うようになった。

（結婚してからますます充実して綺麗になってたり、仕事や子育てで忙しい人ばかり）

頼みの夫、ユウトはというと、仕事の愚痴を一方的に話してくることはあっても、ミオリの話しはほとんど聞かない。

ミオリは次第に孤独を抱えていった。

<中略>

急に恥ずかしくなる。無意識とはいえそんな風になっていて、しかもバレてたなんて。

「ごめん、俺また変なこと言った。勝手な思い込みかもしれないのにね。いつもはこんなじゃないんだ」

自分でも心当たりが、ないわけじゃない。

「なんか、ミオリさんといると調子狂うんだよね。……キス、していいかな」

返事がないのを肯定ととったのか、ヒカルさんは唇をゆっくりと近づけてきて、やがて重なった。

想像よりも熱っぽい唇が押し当てられる。

長いこと忘れていたその感触に、頭の一部が痺れていくみたいだった。目を閉じていると余計、リップ音が耳に届いてくる。

(ああ、私…ヒカルさんとキス、してるんだ)

いくつも壁を作って、安全圏にいたつもりだった。

でも、じつはずっと求めていたのかもしれない。と思うくらいにヒカルさんの腕の中にいることが、そしてキスが快かった。

腰のあたりに手を回されて、しっかり抱きとめられている。
かすかにいい匂いがした。パインにマンゴーを混ぜたような。

（フルーティで、美味しそうな香り。ヒカルさんの匂い、すごく落ち着く…）

手を取られて、ベッドへ行く。
ヒカルさんは疲れたでしょ、と言いながら私の首や肩を優しく揉んでくれた。

「あ、気持ちいい…」

そのまま、ヒカルさんの手が胸をもみ始める。綺麗だね、可愛い。と言われてキスされる。

一度に色々されて、息がちょっと苦しいと思っていたら、唇を離してくれた。

「ミオリさん、首すじと髪からいい匂いするね」

似たことを考えていたと知り、少しだけドキッとした。

（仕事終わりでちょっと汗かいてたし…シャワー浴びてきて、よかった）

何か言おうかと迷っていたら、またキスされた。今度は深くなって、厚みのある舌で舐められる。思わず少し口を開けたところへ温かい舌が入ってきた。

「んん……♡」

キスもなんだか甘い。そして、色んなわだかまりがなくなっていく気がする。

「全部見たいな」

ちょっとボーッとしていると、耳元で囁かれる。着ていたシャツのボタンを器用に外されてしまった。ブラとショーツだけにされて、さすがに恥ずかしい。

しかも、こんなことになるなんて思ってなかったから、セクシーな勝負下着とはほど遠い。シンプルなデザインで、色だけは辛うじてそろってる。

ヒカルさんがジャケットを脱ぐ間に、両手で胸を覆っていると腕を取られた。

「どうして隠すの、見せて♡」

枕に押し倒され、布越しにゆっくりと揉まれた。首筋にキスをされながらブラも取り去られる。ヒカルさんが胸に優しく触れる。ちょっともどかしいような感じが、かえって感度をあげていく気がした。

太ももや股の間にも手が伸びて、布越しにクロッチ部分をスリスリと撫でられる。

「あ、そこ、いやあ…っ」

「そうなの？でも、少ししっとりしてる」

ヒカルさんの筋張った手がショーツの中へ潜り込み、愛液を絡めた長い指でスジをスリスリ♡♡と撫でる。クチュクチュという音が聞こえてきて、つぶ、と指が入り込む。ガマンできずに声が出てしまう。

「あ、んんっ……♡♡」

「もう濡れ濡れだね」

声は優しいのに、手の動きが激しい。

それに、同じところばかりを刺激される。

すぐにグチュグチュ♡♡と大き目の水音まで聞こえて来た。

恥ずかしすぎて、ちかくにあったクッションやシーツを引き寄せる。ヒカルさんが、そんな私を見ておかしように笑う。

「ふふっ、それで隠れたつもりなの？あー。ま、いいよ。用があるトコはちゃんと見えてるし♡」

シーツの下に易々と潜り込んだヒカルさんに、グッと足を開かされてしまいドキッとした。

覆いかぶさってきたと思ったら脇腹やおへその周りにキスしたり、舌でねっとりと舐める。

「あ、あああっ♡」

急に激しい快感が襲ってきたと思ったら、ピチャピチャと大きな音もたっている。

一番感じるところが、ヒカルさんの舌にしっかりとらえられているみたい。

こんな急にされると思ってなかった。

「んう……♡♡あ、んっ！」

「いい声だね、もっと聞かせて♡気持ちいいでしょ」

「き、気持ちいい♡ けどおっ。そこばかり、、」

お尻のほうにまでとろおっ、と蜜が垂れているのが分かる。たぶん、ヒカルさんの唾液も沢山混じってそう。それだけでもすごくエッチな感じがして、身体がヒクヒクふるえた。

ナカに舌が入ってきて、ゆっくりマルをかくみたいに舐められてる。ヒカルさんの舌は少しだけざらっとしていて分厚くて、熱くて…それに、快感をそそるみたいな動きをしている。

さっきから、浅いところにある気持ちいいスポットを何度もかすめている。

「ココいい？きゅんってなったね」

「あ、ちが……あ、あう♡♡」

同じところにぐりぐりと舌の先を当ててこられて、たまらなかった。

入りそうだね、とささやく声がして今度はまた指が入ってきた。感じているからか、太さや存在をすごく感じる。

グチュグチュ、と何度も抜き差しをされたあとは、もう1本の指を足されて奥に圧をかけられた。

「はっ、はああ♡♡…ひうゝっああ♡」

すごく気持ちいいけど、目の前がチカチカする。